

## 第四十二課

### ザレバテの女

〔神の喜び給ふ行爲・六〕

#### ▼本課の目的

己が持物を、よろこんで他に與ふることは、神の喜びたまふことを教ふ。

#### ▼資料

(A) 直接資料……列王紀略十七章八―廿四。

(B) 参考資料……第十六課、舊約物語。

#### ▼教話の準備

神はよろこびて與ふる人を愛し給へばなり。(コリント後書九章七)

#### ▼教話の準備

有り餘るほど澤山の持物があつても、他人のために用ふることをいやがる人があります。自分の樂みのためにはお金を湯水のやうに使ひながら、他人の幸ひを計ることをしない人があります。自分のためには贅澤をしても、他人のためにはケチな人が、世の中に多いのです。

しかるに、他人の幸福のために自分の持物をよろこんで與へることは、まことに美しい行爲せいのなほであります。

まして、自分の無けなしの物を、よろこんで他人のために盡すことは、なほさら貴い行爲です。これは、なか／＼あたりまへの人のできることではありません、しかし神さまは此のやうなことを非常におよろこび下さいます。

▲教 話

むかしイスラエル王國に、おそろしい饑饉が三年半も続いた時のこと、神さまのみをしへを傳へるエリヤといふ人は、ケリテ川のはとりの洞穴に隠れて居りました。なせ、エリヤが隠れてゐたか、皆さんは其のわけをご存じでせう。それは、そのおそろしい饑饉はエリヤのせいだと、王さまのアハブが考へて、エリヤを殺さうとしたからでした。

ところが、あまりの日でりに、川の水もかれてしまひ、もうエリヤもそこにゐられなくなりました。すると神さまは、

「エリヤよ、こんどはシドン國へおにげなさい、ザレバテといふ町がある……。」と仰せになりました。

「はい、シドンの國までは遠うございますから、途中、誰かに見つかったら大變でござ

います。」

「さうだ、見つかったら大變だ。アハブ王はお前をさがして殺さうとしてゐる、けれども私は護つてあげる、そして人目にたたぬやう淋しい道をお逃げ、夜出かける方がいい……。」

「はい、さういたしませう、シドンへ往つたら、また洞穴に隠れるのでございますか」

「いゝや、そんなことはしないで宜しい、私はその町のやもめ女にいひつけて、お前を養はせてあげる。」

「その女の家は、お金持でございませうねえ……。」

「さうぢやない、何年か前に、夫に死なれた貧乏な女だ、貧乏なうへに、一人の子供をやしなはなければならぬのだから、すゐぶん可憐さうな家だ……。」

エリヤは、驚いてしまひました、ひどい饑饉なのにお金持の家へいつて泊めてもらふなら、まだいゝとして、貧乏で自分たちでさへ困るところへ往つて世話になるとは

なんとしたことせう。しかしエリヤは、神さまの仰せに従ひました。そして人目にたたぬやうに、晝は匿れて夜あるくやうにして、シドンの國にゆきました。

シドンといへば、イスラエルの西北の國でアハブ王のお妃イゼベルのお國です。もしエリヤが往つたと知れたなら、やつぱり取抑へられるにきまつてゐますから、すこしも油断がありません。そして、やつとのこと、ザレバテの町に近づいてまゐりますと、一人の貧乏な女が薪をひろつてをりました。エリヤは、それを見かけて、

「もし、一寸おねがひですが、水を一杯のまして下さいませんか。」

と、頼みました、女は振りかへつて其の人はと見れば、汗と埃にまみれた旅の人、口をやけた疲れ顔をしてゐます、

「はい、さぞお渴きになりましたでせう、只今持つてきて差上げませう。」

と言つて、女は親切にも、自分のお家へ急がうとしますと、エリヤは、あとから呼びとめて、

「これ、おかみさん、實はお腹もすいてゐる、ついでにパンも一片持つてきて下さい」と申しました。

女は立ちどまりましたが、返事にこまつてしまひました、何と答へたらいいのでせう、といふのは、お家にただ一片のパンもないのです。女はしばしたためらひましたがさて考へて、

「旅のお方！ あひにく、ただ一片のパンもございません。お恥しいことでございます、しかし、まだ一つかみの麥粉が残つてゐますから、それでこさへて上げませう、その粉が私の家の、食物のありつたけでございます。……拾つたこの薪で、その粉をパンに焼き、子供と二人で食べれば、もう明日からは、なんにも食べることができません。だけど、どうせ餓死にする命でございますから、よろこんでお分けいたしませう。」

と申しました。エリヤは、

「おかみさん、そんなに心配することはありません、神さまはあなたの心がけをおよろこび下さるのだ、さあパンをおこしらへなさい、そして出来たらまづ私に持つてきて、その残りをあなたが食べなさい。」と申しました。

ザレバテの女は、よろこんでエリヤの言ふことに従ひました、——明日から何にも食物がないといふのですから、たとひ一口のパンでも惜しい時ですのに。エリヤは、「神さまは、生きておいでなさる、決してあなたがたを見殺しにはなさいません、餓僅がをはるまで、いりようなものはお與へくださいます。」と言つて勵ましました。

そしてパンができた時、エリヤはその女の家へいつてそれをたべました。そして其處に泊まりましたが、さて翌朝、女が粉桶をのぞいて見ると粉が入れてあり、瓶の中にはパンのためにつかふ油がはいつてありました。

「まあ、嬉しいこと……、まったく旅のお方の仰しやつた通りです。私たちは今日も食物がいただける……。それにしてもあのお方はどなたでせう。」

と、獨語しながら朝の食事の用意をし、エリヤの起きるのを待ちました、それから、エリヤに今朝のことをおはなしし、

「失禮ながら、あなたさまは神さまのみをしへを傳へる預言者でいらつしやいますか」と、ききますと、エリヤは、

「はい、さうです。私はアハブ王に憎まれて隠れてゐる者、神さまはあなたのところに私をお匿しく下さるのです。」

と申しますと、女はよろこんで、

「さやうであらつしやいますか、こんなむさつくるしい處に、勿體なうございますがどうぞ、御遠慮なくいつまでもお泊りくださいまし。」と言ひました。

そして、パンの粉と油は、いつまでも續きましたが、さて或る日のこと、その女のたつた一人の子供は激しい病氣になつて死んでしまひました、女は悲しんで、「先生、どういたしませう、私の大事のこの獨子が……。あゝ悲しいく。」と泣きました。どんなに悲しかつたかわかりません。エリヤは、その様子に心をいた

め、  
「これ、そんなに悲しんぢやいけません、神さまに、お頼りなさい。さあ、その子を私にお貸しなさい。」

と言つて、抱きあげて、自分の居室むまにしてゐる二階へゆきましたが、エリヤはその子を自分の寢床にねかし、

「神さま、どうしてあの親切なやもめ女の獨子を死なせて、お苦しめなさいですか、どうぞ此の子を生きかへらせて下さい。」

と、熱心こめてお祈りいたしました。さうすると、不思議やただちに息を吹きかへし

すつかり病氣がなほりましたから、エリヤはそれをつれて階下くだに降り、「さあ、おかみさん、この通り……。」「と言つて、その子をやもめ女にやりました。女は、それを抱きしめて、「まあ、お前、活きかへつて……。神さま、まことに有難うございます。」と、うれし涙にくれました。

ザレバテの女の親切な行爲は、かうして豊かに酬ひられました。

## 第四十三課 紀元節學課

### ▼本課の目的

私たちは年少ながら國民として國家のために盡すべきことを教ふ。

### ▼資料

(A) 直接資料……日本歴史。

(B) 参考資料……母を慕ひて (野邊地天馬著)

### ▼金言

義は國を高くし罪は民をはづかしむ。(箴言十四章卅四)

### ▼教話

二月の十一日、この日は日本の國の紀元節です。紀元節といふのは、昔、神武天皇が此の國をおはじめになつた日です。長らく國の中にゐた悪者をたひらげて、大和の橿原といふところで天皇の御位みかどにおつきなさいました。その日がむかしの暦の正月元日でしたが、今の暦の二月十一日にあたりますから、紀元節にしたのです。「節」といふのはお祝ひといふことで、日本帝國のはじまつたことを記念するお祝ひといふことです。

です。

私たちは、ふしぎにも神さまのみめぐみによつて、此の國に生れ、この國に育つてゐます、この國のお世話をうけ、貴い天皇陛下をいただき居りますから、この國を愛し、この國のために盡さなければなりません。今日は祖國そこくのために盡したオランダの少年のおはなしをいたしましょう。

### ▼例話

獨逸のおとなりのオランダの國は、地面が海よりも低いので、海岸には頑丈な堤防ついでをこしらへて、海の水を防いでゐます。萬一その堤防が破れでもしたなら、國ちうが大洪水になつて亡びてしまふかもわかりません。

あるお天氣の好い日でした、ピーターといふ少年のお母さんは、お家の前に出て、やさしい聲で、

「ピーターや、ピーターや、一寸おいで！」

と、おもしろさうに遊んでゐるピーターを呼びました。少年はすぐお母さんのところへかけつけますと、お母さんは、

「ピーター、あのう御苦勞だが、まだ明るいうちに、いつもの、あの盲目のお爺さんのところへ、往つてきて頂戴な、このお菓子を持つてね、ほら、まだあついたらう、さめない方がおいしいからねえ。」

ピーターは、まだ遊びたかつたでせうけれども、すなほに、

「え、往つてまゐります。あのお爺さんはどんなにか、よろこぶでせう。」  
と言ひながら、にこ／＼して出かけました。

まもなく、お爺さんの住んでゐる小舎につきました。そしてピーターのやさしい快い挨拶が、さびしい眼の見えない貧乏な老人の小舎をどんなに賑はしたことがわかりません。もし老人が眼が見えたら、晴々したピーターの顔も見えますから、尙ほ更ら

「もう日も暮れたのに、どうして歸らないのでせう、私にことはらないで泊るはずもないのだが……。」

と、お母さんは獨りごとしながら、今か今かと待つてをりました。そのうちに日はとつぶり暮れました、お母さんは、ちや矢張りあの人の好いお爺さんのところへ泊まつたと思ひました。

さて、ピーターは如何したのでせう。ピーターはさつきお爺さんの小舎を出た時まだ太陽が堤防越しに海の方に見えてゐましたから、日の暮れるまでには、まだ一時間もあつたのでせう。ポツ／＼歩きながら、路ばたに咲いてゐる花を積んだり、

「おう、おもしろい音がするぞ。」

と、波の音に耳をかたむけたりいたしました。そのうちに風が出てまゐりました、波がだん／＼強くなりました。「ゴトーン、ゴー、ゴー、ゴー」  
と音がいたしました。ピーターは

よろこんだことでせう。

ピーターの持つてきたお菓子は、お爺さんの手に渡されますと、お爺さんは、

「坊ちゃん、いつもく、御親切に有難うございます。」

といつて、おし戴きました。そしてお父さんやお母さんが御丈夫か、坊ちゃんは學校でどんなことを習つたのかと、いろく訊きましたが、ピーターは、

「お爺さん、もつとゐたいんですけど、日が暮れるといけないから、歸ります。また來ますから……。」

と言つて外に出ました、小舎の中は急に火が消えたほどお爺さんは淋しくなりました。

やがて日が暮れかかつて恐ろしい風が吹きはじめましたので、ピーターのお母さんは、心配して幾度もお家の前に出て外を見ました。けれどもピーターは歸つてまゐりません。また出て見ますが、それでも見えません、また出て見ましたけれどもまだ見えません。

「やあ、また荒れてきたな」

いくら荒れたつて大丈夫だよ

我家のお父さんは水門の番人なんだ

お前なんか負けるもんぢやない。

お前は悪い奴だ

この堤防をこはして

この國を滅さうとするのだ。」

と、大きな聲で歌ふやうに怒鳴りました。そしてだんく歩いてをりますと、岸打つ波の音のほかに靜かに、水のチヨロ／＼落ちる響がいたしました。

ピーターは思はず立ちどまつて、さがしますと、堤防の中腹に小さな裂罅ができてそこから砂と水を少しづつ押しながしてゐるのであります。ピーターは、まつさをになりました。そして、いつのまにやら手に握つてゐる草花をなげすてて、その手を



裂罅——小さな穴——にあてました。

楓のやうな小さな手が堤防にびつたりと押しつけられてゐる、幸ひ穴が小さいのでその小さな手が間にあひました。ピーターは少年ながら、その穴が、しまひにはどんなになるのか知つてゐます。

片手に穴をおさへながら、ピーターは、

「大變だ——、堤防がこはれた——。」

と叫びました、その聲がオランダの國にとつては、百萬の敵がおしよせた知らせよりもまだ怖いのです。敵軍が國を亡ぼすには幾日もかゝりませうが、洪水がこの國を奪るには唯一晩ですむのです。

ピーターは叫びつづけました、手がくたびれてまゐりました。いいあんばいだ、誰かききつけて返事をしてゐると思ふと、それは風の音、波の音でした、そして何時までたつても誰も來ませんでした。ピーターの聲が誰のところへもきこえなかつたので

す。

ピーターは、悲しくなりました、あたりが暗くなりましたから、お家へ歸りたくなりました。それでは、村へかけて往つて誰かを呼んで來ませうかとも考へました。けれどもその中に、堤防の穴が大きくなつたら大變だと思ふと、とても手が放せません我慢しながら、我慢しようと思つても、手が痛くなつてきてとてもたまらなくなりましたが、それでも最後の力をこめて穴をおさへて水の漏れるのを防ぎました。

ただの一晚でも、ピーターを自分の側からはなしたことはないのに、お母さんは淋しい一夜を、お祈りしながら過しましたが、朝になつて早く起き、夕方と同じやうに外に出て路をながめました。いよく太陽が道路の上をてらしそめました。そして遙かむかふを黒い人群れの動いてくるのが見えました。

お母さんは、おや何でせうと思ひながら見てをりますと、それがだん／＼近くなる何やらみんなが昇いでくるらしい、やがてそれが自分の家の前に止まりましたから、

お母さんはおどろいて、胸をさわがせながら覗いてみますと、その中に横たはつてゐるのは、蒼青になつて眼をつぶつてゐるピーターでした。

「おやツ、どうして死んだのです、ピーターが？」

と、氣も狂はんばかりに泣き叫ぼうとしますと、人々はおしとどめ、

「いいえ、大丈夫です、坊ちゃんは死んだんぢやありません、寝てゐるのです。安心と疲れとで寝てゐらつしやるのです。御兩親さま、およろこび下さい、坊ちゃんの勇氣によつて、私たちの國が助かつたのです……。」

と、言つて涙にむせびました。お母さんは何の事かさつぱりわかりませんが、そのうちにお父さんもお家の中からかけて来る、そして人々の話をききますと、わが子ながらお國のために夜どほし堤防をまもつたといふ、まことに貴いはなし、その時、美しい日の光がピーターの顔をのぞきこみましたが、ピーターは靜に眼をあいて、ふしぎさうにあたりを見つめ、お父さんとお母さんのゐるのに氣がついて喜びました。

この事があつてから、もうずゐぶん月日がたちましたが、このお話は今でも、オランダの親たちは、風の吹く海の荒れる晩などに、子供たちに語りつたへてゐます。

## 第四十四課

### ダニエルの友人

〔神の喜び給ふ行爲・七〕

#### ▼本課の目的

天の父なる神を禮拜することは、神の最も喜び給ふ事なりと教ゆ。

#### ▼資料

(A) 直接資料……ダニエル書三章一―卅。

(B) 参考資料……第十二課。

## ▼金言

汝わが面オモの前に、我のほか何物をも神とすべからず。(出埃及記二十章三)

## ▼教話の準備

金や銀で作つた物は、どんなに綺麗でも立派でも、それは神さまではありません、木や石を彫つて作つたものは、どんなに見事にできてゐても、それは命のないものですから、神さまではありません。まことの神さまは、人の手で作つたものでなく、却つて人をお作りになつたお方です。神さまは造られたお方でなくて、お造りになつたお方です、金も銀も、木も石も、みんな神さまのお造りになつたものです。

もし、電信柱を拜んだり、郵便のポストにお祈りをしたりしてゐる人があつたら、どうでせう、きつと皆さんがお笑ひになるでせう。しかし、それと同じ木や金でこし

らへたものを有難がつて拜んだりお祈したりする人があります。ただ形がちがふだけで、同じ木や金がどうして有難いものにならう筈はありません。どんな形になつても木は木、金かねは金です。命のあるまことの神さまにはなりません。

## ▼教話

昔バビロンの國にネブカデネザルといふ王さまがありました、この王さまは大層強い方で、四方の國々を平げてバビロンの國を非常に盛んにいたしました。そしてユダヤの國をも打破り、たくさんの人々を捕虜にして歸りましたが、その中から特別に四人の少年をよりだして、王さまと同じ食物、同じお酒をのませようとなさつたことはすつと前にお話いたしました。

その四人の少年は、誰と誰だつたか、ご存じですか、たぶん其の一人の名前だけはきつと覚えていらつしやるでせう。さうです、ダニエルといふ人でした。そのほかの

三人はハナニヤ、ミシヤエル、アザリヤと申しました。

その後、ダニエルは王さまの不思議な夢を當てたり、その理由を申し上げたりして、王さまに重く用ひられ、つひにはバビロン全體の總督といふ偉いお役人になりました。また三人のお友だちも、ダニエルの親切によつて立派な人になり、王さまの御殿にゐて御用をつとめて居りました。

ところが、その頃のこと、ネブカデネザル王は、御自分の偉いはたらきを後の世につたへるためだつたか、高さ九十尺もあらうといふ大きな銅像みたいなものを、黄金でもつてこしらへました、それがドラの野といふ廣い野原にできましたから、朝日や夕日に輝いて、なんとも言へない美しい立派なものでした。

そして、いよく出来上つた時、王さまは盛んなお祝ひをいたしました。國中の役人を呼びあつめ、音楽隊をあひすに、誰でもその金の像を拜むやうに御命令なさいました。そして若しその時拜まない者があつたなら、すぐに爐の火のなかに投げ入れて

焼き殺してしまふといふのでありました。

何しろ、名だたる、大王のなさることとて、ドラの野は大層なにぎはひ盛んな準備に、非常な人出、金の像は高く、聳えてゐます。そして片方では兵隊たちが大きな爐のなかに火を焚きはじめました。もし拜まない者があつたなら、その中に投げ込まうといふ仕度です。

ダニエルは、この日、王さまのお留守をあづかつて御所に残つてゐましたが、お友だちの三人は、ほかの大臣や大將方と一しよにお召をうけて、ドラの野にゆきました。いよく音楽隊は、にぎやかな音楽をはじめましたので、みんながそれをあひづに金の像に向つて拜みました。

ところが、まもなくお役人が王さまの前に進みでて、

「王さま、申し上げます」

「なんである？」

「これ、家來ども、この火は熱くないと見える、もつと焚け、熱くしろ！」

けれども四人は平氣です、縛りはとけてゐます。王さまも、おどろいてしまつて、

「これ、お前たち出ておいで。」

と叫びました。三人は「はい……」とお答へしながら、髪の毛一本焼けず、着物も元のまゝで、火の中から出てまゐりました。

「お前たちの信する神さまは、なるほどお偉い方だ。全く私がわるかつた。そしてお前たちのほかに、もう一人居たやうだつたが……。」

「はい、それは私たちの信する神エホバの使者つかひでございます、神は使者をよこして私たちをお護り下さいました。」

そこで王さまは、神さまの御力におどろいて、國中のものにこの事をお知らせなされ、神さまを敬ふやうに仰せられました。ダニエルとそのお友だちの三人は、どんなに神さまのみめぐみを感じたこととせう。

## 第四十五課 シユネムの客間

「神の喜び給ふ行爲・八」

### ▼本課の目的

旅人を懇ろにすることが、如何に幸なることにして、また神のよろこび給ふ行爲なるかを知らしむ。

### ▼資 料

(A) 直接資料……列王紀略四章八―十七。

(B) 参考資料……ダニエル物語 (野邊地天馬著)

「はい、本日この芽出度いお祝ひに、王さまの仰せに背いて、拜まない者がございませぬ」

「なに、拜まない奴があつたつて？それは何者である、不屈な者どもである、早速これへ召捕れ。」

つれだされたのは、ダニエルのお友だち三人でした。王さまは、それをごらんになり、大層なお腹立ち、

「その方どもは、本當に拜まなかつたのか、私があれば、かたく命令しておいたのに……。」

「はい、恐入りました。しかし私たちは天地の造主なる眞の神さまを拜みますから、木や金で作つたものは拜みません。」

「なにと申す、私が命令をきかぬといふのかこんど樂隊のはじまつた時から拜むなら今度だけは赦してつかはすが是れから後は赦さんぞ。」

「王さまの、お慈悲のほどは深く御禮申上げますが、この事ばかりは御命令に背きましても、眞の神でないものは拜みません。たとひ爐の中にお入れになりましたも仕方がございませぬ、神さまは必ずやお護り下さいます、よし焼死にましても厭はいたしません。」

「なあに、この爐の火に入れられたら、どんな神だつても助けられるものでない。さあ、家來ども、火は七倍ほど熱くして、この三人を投込め！」

と、非常にお怒りになりました。爐の火は強く／＼燃えましたが、そして三人は着物をきたまゝ縛られて火の中に入れられました。

王さまは、「好い氣味だ」とばかり一心に爐の中をのぞいていらつしやいましたが、まことに不思議！爐の中の三人は、まつかな火の中に平氣で立つてゐます、何やらニコ／＼話しながら動いてゐます。それがしかもよく見れば三人でなく四人です、王さまはますます／＼不思議になりました。

「これ、家來ども、この火は熱くないと見える、もつと焚け、熱くしろ！」

けれども四人は平氣です、縛りはとけてゐます。王さまも、おどろいてしまつて、

「これ、お前たち出ておいで。」

と叫びました。三人は「はい……」とお答へしながら、髪の毛一本焼けず、着物も元のまゝで、火の中から出てまゐりました。

「お前たちの信する神さまは、なるほどお偉い方だ。全く私が変わるかつた。そしてお前たちのほかに、もう一人居たやうだつたが……。」

「はい、それは私たちの信する神エホバの使者でございませう、神は使者をよこして私たちをお護り下さいました。」

そこで王さまは、神さまの御力におどろいて、國中のものにこの事をお知らせなされ、神さまを敬ふやうに仰せられました。ダニエルとそのお友だちの三人は、どんなに神さまのみめぐみを感じたこととせう。

## 第四十五課 シユネムの客間

〔神の喜び給ふ行爲・八〕

### ▼本課の目的

旅人を懇ろにすることが、如何に幸なることにして、また神のよろこび給ふ行爲なるかを知らしむ。

### ▼資 料

(A) 直接資料……列王紀略四章八―十七。

(B) 参考資料……ダニエル物語 (野邊地天馬著)

## ▼金言

旅人の接待を忘るな。(ヘナル書十三章二)

## ▼教話の準備

お家にゐれば何とも思はずに暮してをりますが、旅に出るといろいろ不便や不自由をしなければならぬことがあります。何しろお家をはなれて、毎日々々ちがつた村や町を通るのですから、澤山の荷物があればそのためにすゐん不便をいたしますし荷物がないと、いろいろ入用なものに事かけて不自由をいたします。シャツや股引がよごれてもお洗濯することができません、お洗濯ができて乾くまでそこに待つてゐることができません、また赤ちゃんのおしめなども乾かしてゐることができません。一日二日の旅ならば、がまんができませんが、二十日も三十日も、また三月も四月も、

さうした旅をつづけるとしたら、どんなに難儀でせう、また淋しいこととせう。

そのやうな旅人に、できるだけの親切をしてあげたいと思ひます、シャツやハンケチをとりかへて上げてても、温いお茶、冷い水一杯をあげることも、道ををしへて上げても、それがどんなに、その人々のためになることとせう、皆さんは、まだ泊りがけの長い旅をなさつたことはないかも知れませんが、なさつたことのある方はいくらかおわかりになるでせう。

## ▲教話

むかしユダヤの國に、エリシヤといふ人がありました、ある田舎のお百姓さんの家に生れ、小さい時から牛や驢馬をお友だちにして育ちましたが、そのころから、天の神さまを信じ、正しい清い世渡をしてをりました。そして、その頃の預言者エリヤといふ立派な先生に見出され、そのあとつぎに立てられて、大層すぐれた先生になつて



まわりました。

エリシヤは、エリヤの後をついでから、國中の人々に神さまのみをしへを傳へたり王さまを助けて敵を追ひのけたりして、めざましい働きをいたしましたから、みんなが預言者エリシヤ先生といつて敬ひました。けれどもエリシヤは、いつでも粗末な暮をしてをりました、そしてお金もなければ、ろくな着物ともありません、着のみ着のまゝといつた風で、町々村々をめぐつて人々のために盡して居りました。

さて或る日のこと、エリシヤはエズレルといふ町からシユネムといふ町へ旅して居りましたが、その日はひどい暑い日で、息もつまるやうでした、そこでエリシヤはひどく疲れました。ことに其の路は日蔭になる並木とてもないところでしたから、汗みどろになつて歩きつづけました。そしてやつとのこと、シユネムの町へさしかゝりますと、とあるお家のおかみさんが、それを見て、

「あら、先生のやうだ、この暑い日に……まあずるぶんお疲れになつていらつしやる

様子、もし、もし、先生、先生。」

と呼びかけました。

エリシヤは、立ちどまつて振向いて、

「はい、なんぞ御用で……。」

「いえ、用事といふんぢやございませんが、先生、まあ一寸お息みになつて下さいませ、たいそうお疲れのやうで……、それにもうお晝にもなりますから、何がなくとも……。」

「ほお、御親切ありがたう、では一寸掛けさせてもらひませう。」

そのお家は、くらしの豊かなお家でしたが、それよりも嬉しいことは、そのおかみさんの親切なことでした。おかみさんは手まめにお晝の支度にとりかゝり、パンやチーズ（バターを固くしたやうなもの）や、おいしい果物などを取りそろへて、エリシ

ヤの前をだし、

「さあ、どうぞ召上つて下さいまし。」

と言ひました。エリシヤは、その親切のこもつたもてなしを喜んで食べて、一と休みをしましたから、大層元氣づいて、又も出かけてゆきました。

それからといふもの、エリシヤは旅にでかけるたんびに、こゝに立ちよつて休んで疲れをなほすことにきめました。家の人々も、

「あゝ、幸ひなことだ。先生が家うちにゐて下さると、私たちが一層神さまにめぐまれるやうな氣がして嬉しい。」

と言つて喜びました。

ある時、そこのおかみさんは、自分の夫おつとに、

「ねえ、あの先生が、私たちのところで一と休みをなさるのが、どんなに好い助けかわかりませんから、どうでせう、一つ先生が自由に使へるやうなお部屋をこさへて差

上げては……？」

と相談いたしました。夫も、

「うむ、それが好い、きつと先生もおよろこびなさるだらうよ。」

と大賛成、そこで早速大工さん呼んできて、お部屋を作り、寢臺をすゑたり、机や燭臺や、手や顔を洗ふ道具までも、ちやんと備へつけました。

その後のこと、又もエリシヤがやつてまゐりましたから、おかみさんも夫も、待つてましたばかり、さつそく其の部屋へ案内し、その部屋を建てたわけをお話し、

「どうぞ、こゝを先生のものと思召してお用ひくださいませ。」と申しました。

さうすると、エリシヤも大よろこび、

「これはく、何から何まで、あなた方の心づくしは有難い……。」

とお禮を申しました。そしてこの町を通るたんびに休んだり、泊つたりいたしました

これがエリシヤにとつて、どんなにうれしかつたか、どんなに好い助けになつたかわかりません。

さて、ある日のことエリシヤは、お弟子のゲハジをつれて泊りましたが、

「ねえ、ゲハジ、こゝのおかみさんをよんでおいで。」

と申しました。ゲハジは「はい」よ答へたまゝ主家へいつて、おかみさんと呼んでまゐりました。さうするとエリシヤはゲハジに、

「ねえ、お前、おかみさんにきいてごらん、何を望むことがないかつて。私はこの家の人たちにお禮がしたいのぢや、もし都に出て王さまの御用をする人になりたければさうしてやつてもいいのだ……。」

そこでゲハジは、そのはなしをいたしますと、おかみさんは、

「いゝえ、私たちは、やはりこゝにゐて暮らすのが、何より氣樂なのでございます。」

「それでは、何がいゝのか、何か望みがあるだらう……、なんでも遠慮しないで言ふ

がいゝ。」

しかし、おかみさんは何にも申しませんでした。ところがゲハジは、

「あゝ、わかつた。この家にはまだ一人も子供がない……。それにだん／＼年をとるのだから……。さうだ、子供がほしいのならう、ねえ、おかみさん。」

エリシヤも、それを察して、

「さうだ、子供は何よりの寶物、神さまはあなたがたの親切にむくいて、きつと來年の今ごろ玉のやうな赤ちやんをお授けくださるよ。」

と申しました。おかみさんは、

「まあ、先生、私はもうこんなお婆さんになりました、とても赤ちやんなんてありませんよ。」

言ひましたが、ふしぎにも、あくる年になつて、そのおかみさんが可愛らしい赤ちやんを産みました。その家の人たちのよろこびは、實に非常なものでした。

### 教授上の注意

(一) エリシャとエリヤの関係を話すには、第十六課の學課に幾分觸れて、生徒の記憶を新にする方がよろしいと思ひます。

## 第四十六課 奴隸の少女

〔神の喜び給ふ行爲・九〕

### ▼本課の目的

年少といへども、他人の大なる幸福のために盡くし得ることを知らしむ。

### ▼資 料

(A) 直接資料……列王紀略下五章一—十四。

(B) 參考資料……舊約物語、(野邊地天馬著)ダニエル物語。

### ▼金 言

幼子こごといへども、その動作わざによりて、おのれ……をあらはす。(箴言廿一章十二)

### ▼教話の準備

世の中に、いろ／＼の御病氣がありますが、癩病といふ御病氣は、お醫者さまの進んでゐる今でも、まだ本當になほすお薬ができてをりません。ところが、今から二千五六百年もむかし、すつかり癩病がなほつたナアマンといふ大將がありました。しか

も、そのなほる仕方を教へたのは、そのお家の奴隷になつてゐる小娘だつたので、年若い子供でも他人の幸福のために盡すことができるのです。

### ▼教話

むかしスリヤの國がおとなりのユダヤの國を攻めましたが、その時の總司令官のナアマン大將が、澤山の男女を虜にしてスリヤの都ダマスコへ引き揚げましたが、そのうちから可愛らしい少女を選んで、お家の奥さんの奴隷にいたしました。

ナアマンは、スリヤの國にまたとない立派な大將で、飛ぶ鳥をおとす勢でしたから王さまも大層大事にして下さいましたから、その名譽も位も大したもの、そのお家もまことに見事なものでありました。なにしろスリヤの國が四方にならびなき立派な國になつたのも、このナアマン大將のおかげだといふのですからみんなに敬はれるのも無理はないのです。

奴隷になつた少女、その立派なお家につれられてまゐりましたが、自分のお國で教へられてゐた天の神さまにお祈することを忘れませんでした。

ところが、そのうちにナアマン大將が御病氣になりました、しかもそれが癩病といふので、とてもなほる見込みのないもの、いかに強い將軍も、この病氣にかゝつてはもう二度と大軍をひきまはすこともできませんし、王さまのお側にゐて、國中の人々に敬はれることもできません、毎日、お家にとちこもつて、氣持のわるい思ひをして暮さなければなりません。

ですから、ナアマンのお家は、誰もかれも心配して火が消えたやうになりました。わけても心配にやつれてゐらつしやるのは奥さんでした、そして或る日もたつた一人お部屋にこもつて、おもひなやんでおいでになりますと、

「奥さま、奥さま。」

と呼ぶ者があります、耳をすますと、奴隷の少女の聲ですから、

「なんだ御用かい……。」

「はい、一寸おはなし申上げたくございます。」

「どんな事だい。」

少女は恭々しく身をかごめながら、

「奥さま、私はこのあひだちうから、旦那さまの御病氣について考へましたが、しかし、子供のくせにこんなことを申上げて、いかがかと思つたりして、さしひかえても見ましたが、實は私の國に預言者といふお方がございます。その方ならば、きつと癩病がなほせるのでございます。」

「ふむ……、預言者つて、やはりお醫者なのかい。」

「いゝえ、神さまのみをしへを傳へるお方で……。」

「いや、もう神々に祈ることは止めたのだ、なんの甲斐もないのだから……。」

「でも、ユダヤの神さまは、この國の石や金を彫りきざむだのとは違ひます。世界を

お造りあそばしたお方でございますの……。その神さまのお言葉をつたへる預言者は

これまで幾人もの癩病をなほしましてございます。」

と、まごころ込めて申しますと、奥さんは、

「なるほど、さうかい、それでは旦那さまに申上げてみよう。」

と、およろこびになり、さつそくそのことをナアマンに話しましたところ、ナアマンは、

「それでは、王さまのおゆるしを受けて、ユダヤの國へ往つてみよう。」

と申しました。

そして、いよ／＼王さまのおゆるしがありましたので、ナアマンは澤山のおみやげとお供を従へてユダヤの國を指して旅立ちました。あとに残つた奥さんをはじめお家の人々はもとより、その國の人々も、

「どうだらう、將軍さまがおなほりになればいゝが……。」

と、待つて居りました。

ところが、二十日ばかりたつて、待ちに待つてゐた大將のお馬車が戻つてまゐりました、そして大將はと見れば、きれいになほつて若々しくなつて居られましたので、みんなは聲を擧げてよろこびました。奥さんのよろこびはどんなだつたでせう。ナムンは迎へてくれた人々のなかから奴隷の少女を見出して、

「おゝ、娘、娘！お前のおかげでこんなになほつたよ。」

お禮の言葉をのべました、少女のよろこびはどんなだつたでせう。

それにしても、ナムン大將はどうしてなほつたでせう、どんなお醫者もお薬もなほせなかつた癩病が……。ナムンは、すこし落着いてから、

「私は、王さまのおゆるしを受け、お手づからお書きになつた王さまの手紙をもつてユダヤの國へゆきました。さうするとユダヤの王さまは、おどろいて、私にどうして癩病がなほせるでせう、これは多分スリヤの王さまが戦争をしかけるために、こんな

ことを言ひかけるのでせうと思ひました。

ところが、その王さまの家來に、エリシヤといふ人がゐて、王さま、そんな御心配におよびません、ナムンを私のところへおよこしなさい、この國にまことの神さまのおいでなさることを知らせてあげませう、といつたのです。

そこで私は、エリシヤ先生のお家へ往つた、そしてそれは見すばらしい家でした、それはとにかくエリシヤ先生が私を出迎へて、お祈りでもしてくれらることかと思ふと、そうでない、弟子のダハジといふものを取次ぎにだして、會ひもしない、そしてヨルダン河へいつて、その水に七度つかれといふのだ。

私は腹が立つた、なんだ失禮だ、それになんといふ指圖、あんな河にはいつて行水したつて何になる、ダマスコにはもつと美しい河があると思つたから、さつさと歸らうとしたのさ。

しかし、みんなが留めて、せつかく來たのだから、行水してみる方がいゝといふの

です。なるほど、どんな六つかしいことを指圖されても病氣のなほるためなら、がまんしてしてみようと思つて來たのだから、行水するなんてわけもないことだ、あんまり馬鹿／＼しくて腹が立つたのだが、とにかくヨルダン河へいつて水につかつてみたら一度、二度、三度とつかつてみるが、なんのこともない。もう止さうかと思つた、しかし、なほも續けてやつて見て、とう／＼七度つかつたら、夢かと思ふこの變り方すつかりなほつて、赤坊の肌みたいにきれいになつた。私はまつたく驚いた、ユダヤの國の人々の信する神さまは、なんといふ方ある貴いお方でせう、私は心から有難くになりました。

そこで、私もこれから、その神さま——エホバと申上げるその神さまを拜むことにしましたから、ユダヤの國の土を馬車につけて持つてきました、この土をおいて、そこに祭壇を作つてエホバを拜みます。」

と、委しくお話いたしましたから、みんなも神さまの非常な御力におどろきました、

——ナアマン大將をこのやうな幸福にみちびいた少女はどんなに嬉しかつたことでした。う。

## 第四十七課 復習學課

〔神の喜び給ふ行爲・十〕

### ▼本課の目的

第三十三課より本課を加へて、十回の間、飛び／＼ながら神の喜びたまふ行爲について教へたるが、本課はその趣旨を概括し、なほ、如何にして神の喜びたまふ行爲を知るべきかを示し、神の喜びたまふ行爲を高調するものなり。



▼資料

(A) 直接資料……詩篇八十六篇十一上、同卅二篇八上。

(B) 参考資料……第三十三課以下〔神の喜び給ふ行爲一一九〕

▼金言

われ汝を教へ汝を歩むべき路にみちびかん。(詩篇廿二篇八上半)

▼教話

私たちは、これまで飛びくでしたが、九度ほど「神さまのお喜びになる行爲」について学びました。親切なこと、正直なこと、忍耐すること、親孝行なこと、兄弟仲よくすること……など、いろくの事がありました。

その他にも、まだく澤山ありますが、私たちは、その時ごとに、これが神さまのおよろこびになることか如何か、どうしたなら判るでせう。それに就いて今日の金言をごらん下さい、神さまは私たちに歩むべき路を教へてくださるいふのです。歩むべき路といふのは、行つていかどうか、その行ふべきこと、足であるくことにたつたのです。

私たちが、どうしていいのか解らない時、神さまに教えていただくのです、自分の心持できめただけでは、よくないのです。神さまが「これがよろしい」とさとらせてくださるならば、――私たちが迷はずに、神さまのお喜びになるくことを行ふことができるのです。

むかし、バビロンの或る王さまが旅をして、岐れ路のところに来て、右へ往くのか左にゆくのかわからなくなりました。そこで箭筒の中から七八本の矢を一しよに握つてばつと投げ、その矢の先が澤山向いてゐる方の道をすんだといふことです。矢が

違つた方に澤山おちたらどうでせう、ずぬふん、つまらない目にあふではありませんか。

しかし、もしその岐れ目のところに道案内が立ててあつたらどうでせう、それを見てそれに教へてある方へ往けばよろしいのです。ちやうどそのやうに、神さまは私たちに道案内と同じやうな「聖書」といふ御本をくださいました、それを讀めばよろしいのです。

もし、聖書にかいてないことで、私たちがどつちにきめてよろしいか迷ひましたらそれはお祈することです、きつと心のなかに、「あゝ、これだ、これだ……。」と、わかつてきます。

ユダヤの少年にアドルフ・サファイヤといふ人がありました、ある時、街をあるいてゐますと、本屋の窓に「イムマヌエル」といふ本がならべてありました。それはユダヤのことばで「神さまが御一しよにいらつしやる」といふことですから、サファイヤは

「おや、めづらしい名の書物だ、イムマヌエル……。」

と思ひましたが、それからといふもの、その言葉がどうしても忘れられません、それがもとで、この人はキリスト教をしらべてみて、とう／＼信者になり、立派な傳道者になりました。つまり神さまは、イムマヌエルといふ言葉によつてサファイヤに「歩むべき路」をお教へ下さつたのでした。

またフレデリック・ロバートソンといふ偉い先生があります。この人ははじめ軍人にならうと思つてをりました、それがとうして傳道する先生になつたかと申しますと犬が吠えたためでした。ある晩のことロバートソンの可愛がつてゐる犬が、何におどろいたのか「ワン、ワン、ワン」と吠えだしました。

ところが、お隣の小さいお嬢さんが、重い病氣にかかつてゐましたから、そのお母さんが、ロバートソンのところへやつてきて、

「まことに恐れ入りますが、娘が病氣でねむれませんから、もすこし良くなるまで吠

えないやうにして下さいまし。』

と頼みました。ロバートソンはすぐ犬を叱りつけて止めさせ、そのつぎの日はその家へおわびをしながらお見舞にゆきました。それから、その人々と親しくなり、神さまのみ教へをきくやうになり、熱心な信者になりました。そして自分のあゆむべき路は軍人になるのではなく、傳道する人になることだとさとりました。

斯のやうに、私たちがお祈りするならば、神さまは何かの方法で私たちの心に、歩むべき路をお知らせ下さいますから、それに従つて行へばよろしいのです。

皆さんは、ヨセフのお話をおぼえてゐますねえ。あの不親切な兄さんたちは、ヨセフをどうしましたか、エジプトへゆく隊商に賣りました、ヨセフはそんな目にあつた時どうしたでせう、ただ神さまにお祈りいたしました、神さまのおみちびき下さるまゝに従つたのです。

奴隷に賣られ、お金持の家に買ひとられ、だんく／＼出世したと思ふと、こんどは牢

屋に入れられてしまひましたが、ヨセフは神さまが歩むべき路を教へて下さいましたから、その辛いところがまんをいたしました。

ところが、思ひがけなく大臣になりました、なんといふ、はげしい變りかたでせう、どうして大臣になれたでせう、それは神さまが智慧と力をおさづけ下さつたからでした。

ヨセフは大臣になつてゐると、兄さんたちがやつて来て、殺物を賣つて下さいと申しましたねえ、その時ヨセフは兄さんたちにどんなことをしました、そのしたことが神さまのおよろこびになることでしたか。

またダビデのことを學びましたねえ、ダビデは琴をひいて、どんな歌をうたひました、厭らしい歌でしたか、いいえ、それは神さまのおよろこびになる歌でした。またダビデは王さまになつてどんなことを行ひましたか、神さまはそれをどんなにお思ひになつたでせう？

また、僂僂の時ザレバテの婦人がエリヤにどんなことをしましたか。またエリヤのためにお部屋を作った人たちのしたことを神さまはどうお思ひになりましたか。それから癩病になつたナアマン大將に天の神さまのことを教へた小さな娘のことを神さまはどうお考へなされたでせう。神さまのおよろこびになることを、私たちがどうして知ることが出来るでせう。それは、今日申しましたから、もうお覺えになつたでせうねえ、お忘れにならないで下さい。それを約めて言へば。――ねつしんにお祈をする、よく聖書を讀むことです。

日曜學校に来て、聖書のおはなしを學んだり、神さまのことを教へられてお祈りをする人を知るとは幸ひです、その人はだんく大きくなくても、きつと正しい路を迷はずにゆくことが出来るでせう。

ひかしタビデは「エホバよ、なんちの道にをしへたまへ」とお祈りましたが、私たちも同じやうにお祈りいたませう。

## 第四十八課 造物主なる神

〔神の慈愛・一〕

### ▼本課の目的

天の父なる神の慈愛を知らしめると共に、我等も神を愛し奉るべきことを教ふ。

### ▼資料

(A) 直接資料……本年度の第一課、第二課。

(B) 参考資料……創世記物語。

### ▼金言

なんち心をつくし、精神をつくし、思をつくして、主なる汝の神を愛すべし。

### ▼教話の準備

「御恩返し」といふことがあります、ほかの人から親切にされたら、それを有難く思つてお禮をしようと考へて、その人のために盡すことを申します。これはまことに美しい行爲です。また「恩知らず」といふことがあります、ほかの人に世話になつても、有難いとも思はないことで、これはまことに宜しくない事であります。

私たちは「御恩返し」をする人になりたい、「恩知らず」などと言はれることは非常に恥しいことです。今日は、神さまに對して御恩返ししなければならぬお話をいたしませう。世の中には、神さまの御恩を知らずにゐる人が多いのです。

(178)

### ▲教話

神さまは、美しい天と地とをお造りになりました、天には太陽と月と、それから數

限りもない星をお造りになりましたが、それが一つとして美しくないものはありません。

また海でも山でも、木や草や花。鳥でも魚でも、まことに見事なものです、そして動物の育つ様子、植物の生長するぐあひ、すべてが實に細かに、巧に、またふしぎにできてゐます。

春は春で美しく、夏は夏で別の趣きがあり、秋は秋、冬は冬で風情があります。斯うした立派な世界、美しいふしぎな世界を、誰に下さつたのでせう、天使にでせうかそれとも獅子や虎に？ いゝえ、それは残らず私たち人間に下さつたのです。

神さまは、世界のすべてが出来上つてから、これを自分のものにして、治めさせるために、私たち人間をお造りなさいました。

この世界には、私たちのために入用なものは、なんでも備へてあります、私たちがまじめに正直に働きさへすれば、決して困らないやうになつてゐます。また、熱心に

(179)

探せば探すほど、いよいよふしぎな物が発見せられます。そして、私たちの食物も着物も、家も燈も、氣持よく、便利にできてまゐります。

このやうな、すばらしい世界を神さまにいただいた私たちは、神さまの御恩を有難く思つてゐるでせうか。私たちは、よそから反物一反、お菓子一折、いただいてもお禮を申しますのに、天の神さまにお禮を申上げてゐるでせうか。

ある時、三人づれの人が散歩してをりましたが、どことなく軍人らしい姿の人でした。

いろいろ面白さうに話ながら歩いてゐましたが、ふと途中で、立派な黒馬の立つてゐるのに出會つて急に立ちどまりました。そして一人が「やあ、お前はどうして此處に？」と叫んで、何やら馬の名をよびますと、馬は自分の名をよばれたのが解つたのみえ、ひよいと頭を向けました。

その人は、馬の頸をさすつてやりますと、馬はさも嬉しさうに、バカ／＼と足なら

しをするやら、その人の肩に頭をすりつけたりして、言ふに言はれぬ、なつかしさうな様子をいたしました。その人は、ふしぎさうに見てゐた側の人に、

「これはねえ、私が隊にゐました時、五年のあひだ手をかけてやつた馬なんです、この馬ほど氣に入つたのがなかつたんで、ずるぶん可愛がつてやりました。」と言ひました。

また、ある學校の運動場で、生徒たちが、學校から遠くない墓地の、新しいお墓をどうしても離れない犬があると言ひました。そこで、どうかと思つていつて見ると、なるほどその通りで、新しいお墓に前足をおいて、悲しさうに首をさげてゐる見るもあはれな灰色の犬が、垣根のあひだから見えました。

その御主人は、たいそう親切な人でしたが、四五日前に死んで、こゝに葬られたので、犬はそれを慕つて斯うしてゐるのです。子供たちは、お辨當のあまりを投げてやりますと、その時だけやたく／＼食べにきますが、また戻つていつて、どこへもゆき

ません。ところが何日かあとになつたら、いつものやうにお辨當をやつても、犬はできてきませんでした、よくは見えませんでしたがお墓のかけに、主人を慕ふた犬は、そのまゝ死んでしまつたらしいのでした。

また、むかしドイツとフランスと戦争した時のこと、ヒダンといふところに、はげしい戦がありました。そこに只今でも立派な記念碑がたつてゐます、それに、「かれ生命をもとめしに、汝これをあたへて齡の日をかぎりなからしめ給へり」といふ聖書のお言葉がかいてあります。

それを建てたのは、ある陸軍の大佐で、その戦争の時は大尉でした。ある夕方のこと、大尉はそばに死にかけてゐる一人の兵士を見ましたから、

「おい、しつかりしろ、どうにかして上げようか、水が飲みたいか、お母さんに手紙でも出したいか。」

といひますと、兵士は、

「はい、有難うぞんじます、私には親も兄弟もありません、ただお願いですが、私の弾薬盒の中に聖書がはいつてゐます、そのなかのヨハネ傳十四章をおよみ下さい、…

…安心のことが書いてあります。」

と申しますから、大尉はその通りしてやり、

「われ平安を汝らに與ふ」

とあるおことばを讀みますと、兵士はさも楽しさうにしてゐましたが、いよく息が絶えさうになつた時、

「有難うございます。大尉殿！わたしはその安心をもつてゐます、これからイエスさまのおそばへゆきます、それが何よりの望みです。もう何にもいりません、そして、どうぞ此の聖書を私のかたみとしてお持ちください。私はこの聖書によつてイエスさまを信仰することができました。あなたも之れをよんで、イエスさまの有難いことをお悟り下さいまし。」

と言ひました大尉は心から感心しました。そしてこれが因になつて、たいそう熱心な信者になりました。その後、大尉はその兵士のまごころを忘れないために、わざわざその場所に記念碑をたてたのです。

そのやうに、私たちも神さまの御恩を忘れぬやうに、そしてその御恩に少しでもむくいるために、心をつくし、精神をつくし、思をつくして、神さまを敬ひ愛し、神さまの御心をおよろこばせたいと思ひます。

### 第四十九課 神の保護

〔神の慈愛・二〕

#### ▼本課の目的

父なる神は、深き慈愛をもつて、我等の生活を保護したまふことを教ふ。

#### ▼資料

(A) 直接資料 第六課、第七課。

(B) 参考資料……創世記物語。

#### ▼金言

地のあらん限りは、たはまきどき播種時、かりいれどき收穫時、さむ寒、あつ熱、なつゆふ夏冬、および日と夜、やむることあらじ。(創世記八章二十二)

#### ▼教話の準備

お母さまが、私たちにいろいろの物をたべさせてお養ひ下さいます、朝晝晩とそれ／＼考へて、おかずをおこしらへ下さいます。もし朝も晝も晩も同じもの、それが三



日も四日もつづいたら、きつと飽きてしまふでせう。

さうですから、お魚のこともあればお野菜のこともあり、お豆腐のこともあればお芋のこともある、そして私たちが飽きないやうに、よろこんで食べるように工夫して下さいます。

天の神さまは、そのやうに世界ちうの人々をお養ひ下さいます。食物がなくならないやうに、またその食物にいろ／＼の種類をこしらへて飽きないやうにして下さいます。

春夏秋冬とたつあひだに、花の種類もいろ／＼に、食物の数もさまざまに出来てまゐります。もし一年ちう櫻の花ばかり咲いてゐても見飽きるでせう。また一年ちう同じお野菜、おなじお魚ばかりでも飽きるでせう。それが、春にたくさんとれるお魚と秋にたくさんとれるお魚とあつたり。夏に美味しいお野菜と秋にとれるお野菜は別であつたりするので、私達は珍らしがつておいしく食べられるのです。

神さまの御用意がなんとよく出来てゐることでせう。

### ▼ 教 話

あの恐ろしいノアの洪水がやみました時、神さまは、ノアにお約束なさいました。それは、この世界の終りまで、この世のつづくあひだは、

播種時——收穫時——寒熱——夏冬——晝夜

の絶えることはない、といふのでした。

春は、穀物や野菊の種をまく時、また花の咲く季節です。そして蒔いた種が地の上に芽を出したり、木に咲いた花が青い小さな實になる時であります。

夏は、すべての草木の育つ時、木の實のだん／＼大きくなる時です。また私たち子供にとつて夏は遊に好い時です、野原や森で遊ぶによく、車やボートで遊ぶもおもしろく、海や川であそぶにも好いのです。

夏のつぎは秋です、秋は穀物のみのる時、果物の熟す時、そしてみのつた物をたくはへて、冬や春の食物にいたします。

冬は、寒い時、雨やあらしの多い時、また雪のふる期節で、木も草も、田も畑も、お休みをする時です。また子供にとつては勉強をはげむ時で、お家のなかで、學校で忙しくお稽古いたします。

この春、夏、秋、冬が毎年々々順序よくやつてまゐりますから、穀物も野菜もできますし、果物も熟すのです。もし花の咲いた春のあとに、雪の降る冬がきたならば、せつかくできかけた芽や實が凍つて死んでしまふでせう。

春は暖く、冬は寒く、夏は暑く秋は涼しく、斯うした寒さ熱さは、みんな人の體にも、穀物にも、野菜にも、大事なのです。神さまは、私たちのため寒さ暑さをくださるので、寒いから、暑いつてブツ／＼言ひ、暑いつてブツ／＼言ふのは勿體ないことです。

また晝の後に夜あり、夜の後に晝があり、これが一日で、三百六十五日たてば、また同じやうな日くりかへされる、これもまことによくできてゐて、ほんたうにふしぎなほどでございます。去年の三月と、今年の三月とは、同じやうな時候で、おなじやうな花がある、それが神さまは、晝と夜をきまりよく下さるからです。去年の三月は寒かつたが今年の三月は暑くて單衣を着るといつたやうな、めちやくちやな事だつたら、私たちはちつとも安心した暮しをすることができません。

天の神さまが、世界の人の罪をおのぞきなさるために大洪水をお起しなされた時、ノアたちは、どんなに考へたこととせう。どちらを見ても水ばかり、その水もいつひいてしまふことか、一體もとのやうになることかどうか、それさへ判らなかつたのです。

ところが、とにかく水がだん／＼減りました、そして木や草が生えだしました。それから水がいよ／＼ひいたので、ノアの一家族八人が方舟を出て、神さまにお禮を申

上げますと、神さまは「これから先きも、もとのやうに、きまりよく晝があり夜があり、春夏秋冬があるぞよ……。」とお約束下さいましたから、みんなはどんなに安心したことかわかりません。

それからといふもの、引續いて何千年あとの今日まで、神さまのお約束はちやんと續いてゐます、時として豊作で、時としては少しは饑饉のところがありましても、それをならして考へれば、いつの時も、人間はまじめに働かさへすれば、神さまは入用な物をお與へ下さるやうになつてゐるのです。

斯んなお話があります——。あるところにお百姓さんがありました。だん／＼年をとつて、この世を去らなければならぬのですが、自分の息子たちは、お百姓の仕事に熱心でない。さて困つたものだ、こんなことでは、畑もよく掘らないだらうし、草もよくむしらないだらう、こんなことでは作物だつて、佳いものはとれないにきまつてゐる。それでは、これから先き貧乏するのは、わかりきつてゐる、さて何とか好い

工夫はないものかと考へました。

そのうちに、いよ／＼死ぬ時になりました、そこでお百姓さんは、息子たちを枕元によんで、

「これ、子供たち！私はこれから神さまのみもとへ往くのだが、お前たちにやる遺産かたみといふのは貴い寶物で、それは、うちの畑にかくしてある。御苦勞だけれど探して見るが好い。」

と申しました。そこでお父さんが亡くなつてから、子供たちは畑を掘り起してみましたが、なか／＼見あたりません。「こゝでもないし、こゝでもない。」と、毎日／＼掘り起し、とう／＼隅から隅まで掘りましたが、なんにも見つかりませんでした。子供たちは、ぶつ／＼言ひました。

「お父さんは、何を言つたものだらう、我々をだましたに違ひない。ただ、つまりぬ骨折損をした。」

けれども、その年も秋になりました。ところが、息子たちの畑だけは、どこの誰よりも立派で、作物は一ばん豊かにとれました。自分たちもおどろきましたか、近所の人々もおどろきました。息子たちは、

「なるほど、私たちのお父さんは、嘘をおつしやらなかつた、やつぱり畑に寶物をかくしておおきになつた、その證據はこれこの通り……。」  
と言つて、大よろこびいたしました。

息子たちは、毎年畑を十分にほりおこして、種をまきましたから、穀物も野菜もみごとにとれましたから、大層幸ひに暮すことができました。

### 教授上の注意

(一)春夏秋冬の期節の變化、特徴は、ごく一般的に述べましたもので、極めて不十分でありますから、教師はその土地に應じて適切な説明をしなければなりません。

## 第五十課 近く在し給ふ神

〔神の慈愛・三〕

### ▼本課の目的

神は常に、われらに最近いとぢかくいまし給ふことを知らしむ。

### ▼資 料

(A)直接資料……第卅五課より第卅八課まで。

### ▼金 言

エホバ、ヨセフと共に在す。(創世記卅九章二)

▼教話の準備

八歳になつた直ちやんといふ少年が、ある日、日曜學校から歸つてきて、

「お母さん、神さまが、いつまでも一しよにゐて下さいますから、怖かないんですつてねえ。」

と言ひました。お母さんは、

「さうよ、夜でも晝でも、神さまがそばにゐて下さるから怖かないんです、直ちやんうれしなくなつて？」

「ええ、僕うれしいなあ、神さまが一しよにゐらつしやるから怖かない。」

と、直ちやんは毎日さう言つてよろこんでをりました。

さて、或る晩のこと、直ちやんは夜中に眼をさまし、

「お母さん、おしつこです……。」

と言つて、お母さんを起しました、ところがその晩、お母さんは御病氣で、おきてあげられませんでした。

「ねえ、お母さん、おしつこです、つれてつて頂戴！」

「はい、でもねえ直ちやん、お母さんは御病氣でつれてつて上げられないから、ひとりで往つておいでよ。」

「だつて、……だつて、怖いんですもの……。」

「い、え、怖ありませんよ、それ、手燭をつけてあげるから、これを持ってね……。」

「だつて、僕……怖いんだもの……。」

と直ちやんの聲はふるへてゐます。そこでお母さんは、

「でも、神さまは一しよにゐらつしやるんだよ、神さまが一しよにゐて下されば、どこだつて怖かないんでせう。」

すると直ちやんは急に元氣づき、

「うむ、さうく、神さまが一しよにゐらつしやる、神さまが一しよにゐらつしやるから怖かないんだ……。」

と言ひながら、はぬ起きました。そして手燭をもつて獨りで出かけましたが、廊下へいくと、またも怖くなりました、けれども勇氣をだして、

「神さまが一しよにゐらつしやるから怖かない……。」

と幾度もくりかへして、とうく往つてまゐりました。そして、その夜から、もし夜中に眼がさめる時があつても、きつと獨りで往つてくるやうになりました。

神さまが一しよにゐて下さる……と思ふことは、たしかに私たちの心をつよくいたしますし、神さまも確に私たちをお助け下さいますから、ほかの人が怖がることでも厭がることでも、どしくやつてゆくことが出来るのです。

## ▼教 話

今日の金言は「エホバ、ヨセフとともに在せり」と言つて、ヨセフのことを引いてをります。ヨセフといふのは、この前にお話したあのエジプトの總理大臣になつたヨセフのことです。

ヨセフは、小さい子供でお家にゐる時でも、お父さんの仰せをうけて兄さんをさがしに野原をひとり歩いてゐる時でも、古井戸の中に投げられた時でも、遠いエジプトへつれられてゆく時でも、ポテバルのお家につとめてゐる時も、恐ろしい牢屋のなかに入れられた時も、また王さまの前に出た時も、總理大臣になつた時も、——いつでも、ヨセフと一しよにおいでになつて、可愛がつて、お護り下さいました。

さうですから、ヨセフは、どんな目にあつても、少しも恐れませんでした、失望したり、悲しみ歎いたりすることがありませんでした。

また、ダビデもさうでした。神さまはいつも彼と一しよにおいでになりますから、まだ羊飼をしてゐて獅子や熊と戦ふ時でも、またサウル王のところへ出た時も、ゴリアテ大將と戦ふ時も、決して恐れませんでした、神さまはそのたんびに危いところから、お助け下さいました。

またイエスさまをお育て申上げたヨセフとマリヤも、いつも神さまに護つていただき、危いところを助けていただきました。——神さまは、すなほな心を以て信仰し正しい世渡りをする人に近くおいでになり、いつもお護り下さるのです。

## 第五十一課 復活節學課

### ▼本課の目的

主イエスのお甦りの事實と、それによりて、生命の勝利と歡喜とを教ふ。

### ▼資料

(A) 直接資料……ヨハネ傳十九章卅一—四十。同廿章一一八。路加傳廿四章五十、五十一。

(B) 參考資料……第二十三課。

### ▼金言

視よ、世々限りなく生く。(ヨハネ黙示録一章十八)

### ▼教話の準備

もう春になりました。冬のおひだ枯れたやうな枝に、可愛い芽がでて、それが葉になつたり、蕾になつたりいたしました。それが木の枝ばかりでなく、すべてのものが

活きかへつて見違へるやうになりました。

それはなせでせう——。神さまが、草や木や動物に命をお與へになつたからでせう。木の中にある命、種の中にある命、卵の中にある命が働きだしたからです。——今日は、その尊い命のおはなしをいたしませう。

### ▼教 話

すべての命のうち、一ばん貴いのは主イエスさまの命です。しかるに天の神さまは私たちを罪からお救ひくださるために、イエスさまを十字架におつけになりました。あはれ尊いイエスさまは苦しい御最後をおとげなさいました。

お弟子たちは、アリマタヤのヨセフといふ人の親切で、イエスさまを十字架からおろして、お墓へ入れました。するとロマの兵隊はお墓の蓋に封印をして、それを守りました。なせといふに、イエスさまは「たとひ十字架にかけられても三日目に活きかへ

る」と仰しやつたので、もしお弟子たちがイエスさまの屍をどこかへかくし、そして「イエスさまが甦つた」と言ひふらしはしまいかと考へたからでした。ユダヤのお墓は山や崖の横に穴を掘りその中をお部屋のやうにして、死んだ人を入れたのです。お葬ひがすんで、つぎの日はユダヤの安息日で、誰もが仕事を休んで、神殿へいつたり會堂へ出かけたりする日でしたから、誰もお墓まわりをしませんでした。その次ぎの日の朝、つまり安息日のすぎた朝、女のお弟子たちが、夜のあけるのを待ちかねて、お墓まわりに出かけました。

その時、女たちは、お墓まわりをすることも、お墓の蓋は大きな石だ、しかも兵隊が番をしてゐることですから、どうしたものでせうと心配しながらゆきました。けれどもお墓に近づいて見ると、兵隊はただの一人も居りません。その上、お墓の蓋はちやんととれてゐる。おや、どうした事だと思ひながら、こはこは中へはいつて見ると、誰も居りません。そればかりでなく、イエスさまのお體もおいてゐないので



す。

「ぢや、もしかしたら、ロマの兵隊が先生のおからだを持って往つたかも知れませんが、それにしても何處へ持つてたものでせう。」

と女たちは、いよ／＼ふしぎに思ひながら、エルサレムの町に歸つて、ペテロやヨハネにおはなしたしますと、二人は「それは大變だ……」と言つて駈けだしました。そしてお墓をしらべて見れば、なるほど女たちの言つた通り、それかと言つて誰もそばにゐませんから訊いて見ることもできません、二人はそのまゝエルサレムへ戻つてゆきました。

さてその女のお弟子のうちにマグダラのマリヤといふ人がありましたが、ペテロやヨハネとゆきちがひに、お墓へもどつてきて、泣きながら、中を覗いて見ますと、いつのまにか二人の天使が、坐つて居りました。マリヤは

「おやッ」と思ふまに、天使は、

「なにを泣くんですの……？」

と言ひました、マリヤは、

「誰かしら、主イエスさまを持つてゆきました……。」

と答へてから、うしろを振向くと、そこにイエスさまが立つておいでになりました。

けれどもマリヤは、イエスさまとは知らずにゐますと、イエスさまは、

「何を泣くのだ、誰をたづねてゐるのだ。」

と、おききになりました。マリヤは、たぶん此の人は、その番人でせうと思ひ、

「もし、あなた、私の先生をどこへ持つてたのか御存じありませんか。」

と、ききました。イエスさまは、

「まあ、マリヤよ。」

と、力をこめて仰しやいますと、マリヤは初めて氣がついて、

「あゝ、先生？まあ、うれしい。」

と叫んで、イエスさまのおみ足に飛びつかうとしますと、

「私に觸るんぢやない、私はまだ天に昇らない。だが、お前はみんなに、先生は甦つて天にお昇りなさるとお話しなさい。」

と仰せになりました。マリヤは嬉しくつて、嬉しくつてたまりませんでした、そして「私は、甦つた先生にお目にかゝりました。」と、みんなに言ひふりました。

そしてイエスさまは、四十日のあひだ、時々、お弟子たちのところへおいでになつて、おはなしをなさつた後、一しよに食物をめしあがつたりなさいましたが、そのお體は、もとは違つてをりました。——といふのは、戸がしめてあつてもお入りになることができたり、食べなくつてもひもじくない、——つまり甦つたお體でした。

かうして四十日のあひだ、この世においでになりましたが、イエスさまは十一人のお弟子たちをおつれになつて、エルサレムのそばにあるオリブの山へおいでになり、

いろく大事なみをしへをおきかせなさいましたが、お弟子たちの見てゐる前で、すうとお體が浮きあがりました。みんなはおどろいて、

「あれ、先生、どうなさいますの?」

「私は、天の父さまのところへ歸るのだ。お前たちは地の極までも往つて、私の救主であることや死より甦つたことを、お傳へなさい。」

と仰せられ、一メートルまた一メートル、上へくとお昇りになつて、つひには見えなくおなりなさいました。

## 第五十二課 神への謝恩

〔神の慈愛・四〕

### ▼本課の目的

我等は、神の恩寵に對し、謝恩の精神をあらはすために、出来るだけの行爲をなすべきを教ふ。

( 206 )

### ▼資料

(A) 直接資料……馬太傳第二十五章三一—四六

(B) 參考資料……四十二課、四十五課、四十九課、トルストイの物語

### ▼金言

わが兄弟なる此等のいと小さき者の一人になしたるは、即ち我に爲したるなり。

(馬太傳廿五章四十)

### ▼教話の準備

神さまの御恩に報いなければならぬことはこの前、第四十九課でおはなしいたしましたが、その時どんなことをすれば、その御恩返しになることか、それまでお話しせずにはまいました。今日はその事をお話しいたしませう。むかし、ノアは神さまにお禮をするために、牛や羊を祭壇にそなへ火でやいて、神さまに差上げました。アブラハムもそれからモーセも、ダビデもそれをいたしました。神さまはそのやうなお祭よりも、まごころから神さまを有難く思つて行ふ愛の行爲をおよろこび下さると仰せ

( 207 )

になりました。

### ▼教 話

「愛の行爲は、小さくとも……」といふ折返のあるさんびかが、第二篇の百九十六番にあります、意味のふかい歌です。

たとひ、小さいことでも、神さまは愛のわざをおよろこび下さいます、いくら大きなことでも、愛心がこもつてゐなければ、神さまはおよろこびになりません。

ある小さい子供が、一片のパンをあはれな乞食にやりました。それからお友だちが石につまずいて、膝をけがしたのを、親切に血をぬぐつたりお薬をつけてやりました。また或る子供は、鼻緒をさらして困つてゐる人に麻絲をだしてつて上げました。またある子供は、あんまさんが笛をおとして探してゐるのを拾つてあげました。——こんなことは、なるほど、わけもない誰にでも出来る小さなことです。けれども神さまは

およろこび下さるのです。

十萬、二十萬といふ澤山のお金を出して學校をたてるとか、自分の財産をへらして村のため町のために橋をかけるとか、百里や二百里もある遠いところへ出かけるとか、いふことは、誰でもできることではありません。けれども、いくら大きなことでも愛心のないことなら、それは神さまをおよろこばせることができません。

神さまのおよろこびになることを行ふことが、神さまに御恩返しすることです。神さまは目に見えないお方ですから、お菓子や着物や寶物を差上げたとお受取りになりません。しかし、神さまに差上げる心持で、それを困つてゐる人、可憐さうな人、氣の毒な人に差上げればいゝのです。

これはロシヤのおはなしですが、熱心な信者の靴屋の小父さんが、ある寒い冬の夜に聖書を讀んでをりますと、

「明日、私がお前の家へ住くよ。」

とイエスさまの御聲がいたしました。靴屋さんはおほよろこび、あくる日は朝早くおきてお部屋をきれいにし、ストーヴをたいてお部屋を暖かにし、御馳走をこさへて、イエスさまが何時おいでになつても、いゝやうにお待ちいたしました。けれども日がくれるまでお待ちしてもイエスさまはお出で下さいませんでした。

靴屋さんは、朝から晩まで、仕事をしながら、今かくとお待ちしましたが、そこのお家へきたのは、たつた三人で、一人は貧乏な子供で、一人は赤坊をおぶつたあはれなおかみさん、もう一人は可憐さうなお婆さんでした。靴屋さんはその三人をストーヴにあてたり、おいしい御馳走をたべさせたり、帽子や毛布をくれたりしてやりました。けれどもイエスさまがおいでにならないので、がっかりしてしまひました。

靴屋さんは、またもランプのそばで、聖書を読みながらお祈りをして、

「イエスさま、私は今日どんなにあなたさまのおいでになるのをお待ち申しましたかわかりません、それなのにおいで下さいませんから、がっかりしてしまひました、私

々の信仰がたりないのでおいで下さらなかつたのでせうか。」

と申しますと、イエスさまは、

「いゝえ、今日のまごころからのもてなしは、實にうれしかつたよ。」

と仰せられました。靴屋さんは、

「いゝえ、今日はたつた三人可憐さうな人がきたつきりでした。」

「さうだ、その可憐さうな三人を親切にしたのは、私に盡して呉れたのだ。」

と仰せになりましたから、靴屋さんもはじめてその意味をさとりました。

「有難うございました、それで私も安心いたしました。」

と申上げました。

ついでに、もう一つお話しいたしませう。それはスペインのおはなしですが、大層熱心な信者のお百姓さんがありました。この人は毎朝、會堂へよつてお祈りをしては仕事に出かけました。仕事にかゝれば一生けんめい、他の人々が煙草をのんだり、酒を

のんだり、怠けたりしても、このお百姓さんは、それは／＼よく働きましたから、他の人の三倍も仕事ができました。

そして主人からもらったお金をせつせとためましたが、それは、どうかして、一度イエスさまのお生れになつたユダヤの國へいつてみたいと思つたためでした。お百姓さんは、イエスさまのお生れになつたユダヤへいつて、お祈をしたり、イエスさまのお苦みになつた場所へいつたりして、イエスさまを有難く思つたりしたならば、どんなに神さまもおよろこび下さるでせうと考へました。

そこで、お百姓さんはせつせとお金をためました。もとより澤山でもないお給金をためるので、おいそれとはたまりません、しかし少しづつはたまりますから、それが楽しみでした。そこでお百姓さんは、たまるお金がなくなつては大變ですからわざときたない布で袋をこさへて、それにいれました。そして何年かたつとお金もその袋の中に一ぱいになりました。お百姓さんは、

「あゝ、これだけあつたら、イエスさまのお生れになつたお國へ往けるだらう、何年といふ長い／＼あひだの願ひも達せられる時がきた。それにしても何日出かけることにしようか。」

と、たのしんでをりました。

ところが、ある夕暮、お百姓さんのところへ「お免ください／＼」とやつて來た人がありました。誰だかきいたこともない聲ですから、ふしぎに思つて戸をあけると、それはよぼ／＼のお爺さんで、日がくれてこまるから泊めてくださいといふのです。

お百姓さんは、可憐さうに思つて、お家のなかに入れてやり、火をたいたり、お湯をわかしたり、ありたけの食物——しかしそれは粗末な物——を出して、心からもてなしました。あはれなお爺さんは、たいそう喜んで、自分の可憐さうな身上ばなしをはじめました、お爺さんは、

「私は、遠い國から今自分の生れた故郷へかへるところです。けれども途中で大事に持

つてきたお金は、悪者のために取上げられてしまひました。これからも、まだく何百里といふあひだ、野越え山越えて、ゆかなければなりませんから、故郷へつくのはいつのことやらわかりません。」

と、泣きながらおはなしいたしました。お百姓さんは氣の毒になつて、

「お爺さん、それでもお金があつたら、馬車に乗つたりして早くゆけるでせう。」

「それや、さうですとも、お金があれば……。」

「では、お金がどれほどあれば好いのです？」

「さうですねえ、千圓もあつたら足りるでせう。」

「ふむ、千圓……。」

それが、ちやうどお百姓さんがためたほどのお金なのです。お百姓さんは、考へました、どうしませう、そのお金をお爺さんにあげればいゝのだが、さうすると自分はイエスさまのお國へゆけなくなる、神さまをおよろこばせることはできないのだ。

しかし、このお爺さんを助けることも神さまのおよろこびになることだ、どつちにしませう、さうだ、神さまはユダヤの國へゆくよりも、このお爺さんを助ける方をおよろこび下さるに違ひない……と考へついで、

「お爺さん……、では、それだけのお金をあなたに上げませう、それはこれに入つてゐます、これを馬車代にして、一日も早くお家へおかへりなさい。」

と言ひながら、お金の袋をそのまゝお爺さんにやりました。お爺さんは夢かとはばかりよろこんでお禮を言ひました。

そして、お爺さんを泊めました。お百姓さんは其晩ふしぎな夢を見ました。それはどうでせう、イエスさまのお國を旅してゐる夢でした、しかも美しい天の使に案内されて……。

そして翌朝になつてお爺さんがそのお金をもらつて出かけましたが、そのお爺さんこそは、夢のうちに見た天の使でありました。

▼附記▲

(一) 學課の教授時間が一定いたし居るに係らず、本書の各課に幾分長短のありますのは、編者の不明の致すところで相済みません。なるべくそれのないやうに努力いたしました。が止むを得ませんでしたことをお詫びいたします。

何卒、御取捨の上御使用あらんことを希望いたします。

(二) には第二十九課、三十課、三十六課、三十七課はダビデの傳をいろ／＼の方面に向けたのですから、どうしても同じところに觸れるのですが、それはこの時代の兒童にとつて差支へないことと思ひます。わけて新しい兒童の交つてゐる時は連絡がとれて結構であります。しかし、場合によつては前回のところに觸れないやうにしても構ひません。兒童の種類によつて取捨を要することと思ひます。

昭和二年十二月一日印刷  
昭和二年十二月五日發行

定價壹圓五拾錢

不許複製

發行所

東京市神田區錦町一丁目八番地

日本日曜學校協會出版部

電話神田(二五)二七七四番  
振替東京一八〇〇四番

編纂者 日本日曜學校協會文學委員

發行者 龜德一男  
東京市神田區錦町一丁目八番地

印刷者 澤田文雄  
東京市外西巢鴨町庚申塚一二六番地

印刷所 學園印刷所  
東京市外西巢鴨町庚申塚一二六番地



書名	著者	定價	郵稅
日曜學校協會	同日曜學校讚美歌	一、〇〇	〇、〇六
柳原貞次郎	教育的心理學	五、五〇	〇、〇四
赤星仙太郎	舊約聖書教授法	五、五〇	〇、〇四
赤星仙太郎	基督教傳教授法	五、五〇	〇、〇四
海老澤亮	教會學校宗教教育史	五、五〇	〇、〇四
鈴鹿正一	舊約物語エステル姫	一、〇〇	〇、〇四
野邊地天馬	童話集幼き日姫	一、八〇	〇、〇八
村岡花子	物語集島の娘	一、八〇	〇、〇八
山村暮鳥	聖フランシス	一、五〇	〇、〇八
上澤謙二	兒童說教子供を眞中にして	一、五〇	〇、〇六
津川圭一	子供聖歌集銀の星	一、〇〇	〇、〇六

東京市神田區錦町一ノ八  
**日本日曜學校協會出版部**  
 電話神田(二五二) 四七七二 振替東京一八〇〇四

終

